オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査
試行プロジェクト審査会委員

※五十音順、敬称略

○青柳 正規（あおやぎ まさのり）　※委員長

講評コメント：
オリパラの機運醸成のためには、継続的に取り組んでいくことが重要である。

ギリシア･ローマ考古学者、第 21 代文化庁長官。
1944 年大連生まれ。1967 年東京大学文学部美術史学科卒業。1969～1972 年ローマ大学に留学、古代ローマ美術史・考古学を学ぶ。文学博士。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、同研究科長、文学部長、同副学長を経て、国立西洋美術館長。東京大学名誉教授。日本学士院会員。2006 年紫綬褒章。2011 年 NHK 放送文化賞受賞。2013 年～2016 年 4 月まで文化庁長官。
ポンペイ「エウローパの舟の家」（1974-78）、シチリアのレアルモンテのローマ時代別荘（1980-86）、タルクィニア近郊のローマ時代の別荘（1992-2003）、ソンマ・ヴェスヴィアーナの所謂「アウグストゥスの別荘」（2002-）の発掘にあたる。
著作に、『エウローパの舟の家』（地中海学会賞）、『古代都市ローマ』（マルコ・ポーロ賞、浜田青陵賞）、『皇帝たちの都ローマ』（毎日出版文化賞）、『トリマルキオの饗宴』（小学館）など。

○朝原　宣治（あさはら のぶはる）

講評コメント：
アスリートとして、オリパラの選手達がスポーツの力だけでなく、その経験やネットワークを生かし、歴史や文化にも関心を持てるような、取り組みの中心となれるようなプロジェクトを期待したい。

大阪ガス株式会社、北京五輪銅メダリスト
1972 年生まれ　同志社大学→大阪ガス株式会社（近畿圏部地域活力創造チームマネジャー）
同志社大学 3 年生の国体 100mで 10 秒 19 の日本記録樹立。その加速力から「和製カール・ルイス」と呼ばれた。大阪ガス株式会社に入社後、アトランタオリンピック 100m出場。日本人選手として準決勝に 28 年ぶりに進出した。オリンピックには 4 回連続出場。自己最高記録は 10 秒 02 の日本歴代３位。2008 年北京オリンピック 4×100mリレーでは､悲願の銅メダル獲得｡現在は､陸上競技クラブ｢NOBY T＆F CLUB｣の主宰者、一般社団法人アスリートネットワークの副理事長として「スポーツを通じた健康力の高いまちづくり｣､｢世界いち住みたいまちづくり｣活動を推進している。

○生駒 芳子（いこま よしこ）

講評コメント：
伝統文化、アート、テクノロジー等さまざまな提案があった。この試行プロジェクトで期待することは地方から、47 都道府県から文化発信できること。カッコいいことができると皆が認識すること。それが反映され、次につなげていくきっかけになればよい。

ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー、一般社団法人フュートゥラディションワオ代表理事、文化庁日本遺産プロデューサー、内閣府クールジャパン官民連携プラットフォームアドバイザリーボード、　三重テラス・クリエイティブディレクター、ジャパン･ファッション・ウィークコミッティ、デザイン・アソシエーション NPO 理事など。
VOGUE、ELLE での副編集長を経て、2004 年より マリ・クレール 日本版編集長に就任。社会派の記事を取り込んだ日本で初めてのファッション誌として話題を呼ぶ。2008 年 11 月独立。日本の伝統工芸を世界発進するプロジェクト「工芸ルネッサンス WAO」の総合プロデューサーを務め、パリ、東京でファッションやデザイン、アートを切り口としたキュレーションで伝統工芸品を紹介。
杉野服飾大学大学院（アートとファッション）で講師を務める。

○小山 薫堂（こやま くんどう）

講評コメント：
政策意義のあるよい提案をしてもらうには、募集告知の工夫、やり方、システムが大事。

放送作家。脚本家。1964 年 6 月 23 日熊本県天草市生まれ。
「カノッサの屈辱」「東京ワンダーホテル」など斬新なテレビ番組を数多く企画。「料理の鉄人」「トリセツ」は国際エミー賞に入賞した。
初脚本となる映画「おくりびと」が、第 32 回日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第 81 回米アカデミー賞外国語映画賞を受賞。
著書に、絵本「まってる。」「いのちのかぞえかた」（千倉書房）、「考えないヒント」「もったいない主義」（共に幻冬舎新書）「恋する日本語」（幻冬舎文庫）など。
執筆活動の他、熊本県地域プロジェクトアドバイザー、下鴨茶寮主人、京都館館長などを務める。人気キャラクター「くまモン」の生みの親でもある。

○田口　亜希（たぐち あき）

講評コメント：
「バリアフリー」に対応・考慮していないものが多い印象。選定された案件はバリアフリーに向けて努力いただき、また「効果・検証」をもっとしっかりと検討いただきたい。それにより次につなげてもらいたい。そしてオリパラの選手たちにも機運醸成プロジェクトに参加してもらいたい。

パラリンピック射撃日本代表、日本パラリンピアンズ協会理事。
大学卒業後、郵船クルーズに入社。客船「飛鳥」にパーサーとして勤務。25 歳の時、脊髄の血管の病気を発症し、車椅子生活になる。退院後、友人の誘いでビームライフルを始め、その後実弾を使用するライフルに転向。
アテネ、北京、ロンドンと３大会連続でパラリンピックに出場。アテネでは７位、北京では８位に入賞。また 2010 年アジアパラ競技大会では銅メダル獲得。現在は日本郵船（株）人事グループに勤務。
2016 年リオデジャネイロオリンピック閉会式「フラッグハンドオーバーセレモニー」検討メンバー（アドバイス担当）、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会アスリート委員、同エンブレム委員会委員などを務める。

○谷川　じゅんじ（たにがわ じゅんじ）

Photo by Kenshu Shintsubo

講評コメント：
応募案件は幅広く、360 度異なる視点で、複合的かつ、多様性のあるものが寄せられた。向いている方向が異なり、わかり難いところもあるが、その違いをうまく組み合わせブランディング・プロデュースし、機運情勢につなぎ込んでいくことが重要。

スペースコンポーザー、JTQ 株式会社代表
　2002 年、空間クリエイティブカンパニー・JTQ を設立。
“空間をメディアにしたメッセージの伝達”をテーマに、さまざまなイベント、エキシビジョン、インスタレーション、商空間開発などを手掛ける。独自の空間開発メソッド「スペースコンポーズ」を提唱、環境と状況の組み合わせによるエクスペリエンスデザインは多方面から注目を集めている。主な仕事に、パリルーブル宮装飾美術館 Kansei 展、平城遷都 1300 年祭記念薬師寺ひかり絵巻、GOOD DESIGN EXHIBITION、MEDIA AMBITION TOKYO など。2016 年現在、外務省 JAPAN HOUSE Los Angeles 総合プロデューサー、茨城県北芸術祭クリエイティブディレクターなどを務める。
http://jtq/jp/

○蜷川 実花（にながわ みか）

講評コメント：
２つの視点でプロジェクトを評価した。
１．子供や障害者が文化に触れる、体験する機会を拡大することで文化の裾野を拡大したい、次世代に繋げたい。
２．弱い所に補助を出して救うよりも、すでに良いもの・強いものに、更に支援することでもっともっと良くしたい。日本の文化レベルを上げていくという視点。
また、日本全国の機運上昇というと地方を重視しすぎたり、″日本の原風景や文化は地方にある″ようにいわれがちだが、東京と地方が一緒に何かをやるような機運をつくるべき。

写真家、映画監督
木村伊兵衛写真賞ほか数々受賞。
映画『さくらん』(2007)、『ヘルタースケルター』(2012) 監督。映像作品も多く手がける。
2008 年、「蜷川実花展」が全国の美術館を巡回。2010 年、Rizzoli N.Y.から写真集を出版、世界各国で話題に。2016 年、台湾の現代美術館（MOCA Taipei）にて大規模な個展を開催し、同館の動員記録を大きく更新した。www.ninamika.com

○横澤 大輔（よこさわ だいすけ）

講評コメント：
東京全体を、オリパラ機運醸成のためのプラットフォームとすべき。東京などは広い場所が少なく、イベントのため、道路や広場の活用をもっとしていくべきだが、規制などで許可とれずできないことも。2020 年に向かってその準備をしていく必要があり、本試行プロジェクトがその手助けになればよい。

株式会社ドワンゴ取締役ＣＣＯ（最高クリエイティブ責任者）
ニコニコ超会議/闘会議統括プロデューサー
豊島区国際アート・カルチャー都市プロデューサー
1981 年、東京都出身。34 歳。2001 年よりドワンゴの携帯コンテンツ制作に始まり、ニコニコ動画公式生放送の仕組みの立ち上げや様々なイベントや新規事業の立ち上げを行う。
「サブカルチャーの 365 日リアルプラットフォーム」として、池袋にイベントスペースやカフェ、ショップなどを擁するニコニコ本社を立ち上げ、毎年 10 月末に実施している「池袋ハロウィンコスプレフェス」では、コスプレイヤー（仮装好き）が日本一集まるイベントを手掛けている。2012 年から幕張メッセで日本の文化祭をテーマに行い、約 15 万人が来場するイベント「ニコニコ超会議」の一環で、超会議が５回目を迎えた今年、初めて企画された歌舞伎とデジタルが融合した「ニコニコ超歌舞伎『今昔饗宴千本桜』（主演：中村獅童・初音ミク）」の総合プロデューサーを務めた。